不破伊織門
名護屋山三

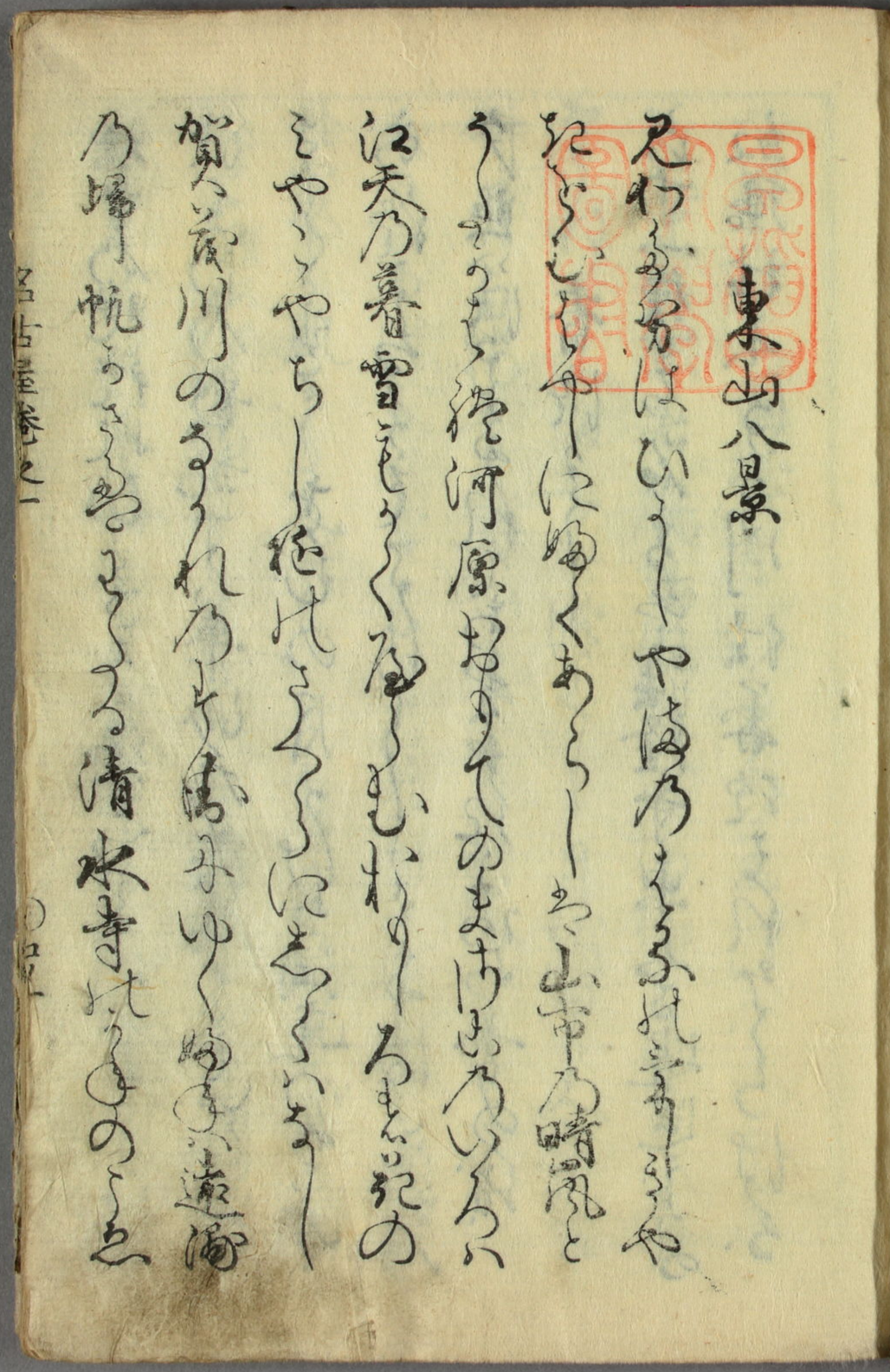
昔語稲妻草紙

へ 13
3254

へ13
3254

昭和十一年
二月二六日

11-2-26



東山八景

見わたせば海のそらにうかぶなる
たごのしらゆきあけぬるかな

しらゆきの山市の晴嵐と
うつるかと絶河原はすてのまちはいろふ
江天の暮雪ともうくるかな
むれすゐ鳥の紀の
をやゝやちしに絶はさくらにそくらいきし
賀茂川のうれのもみゆくまゝに遠海
乃帰帆のさゝ波もとる清水寺はたまのうち

名山堂巻之一

煙寺の晩鐘ひゝきわたる絶えつゝ川のゆくえ
はるかなる海の散乱すゝ平沙の落鴈こゝにおりゐ
さゝく波ゆうさむの月うけて洞庭の秋の
月ゆるすゝもるゝ漁村の
夕照はるゝ雨ふりの秋

香はなゝ

六十一種ゝ名寄法隆寺東大寺道遥院
紅塵枯木ゝ川法華経ゝ

やはらぎ園城寺の鐘の不二れ
ゝ金色槃若鷹鵰相あ秋梅揚ゝ妃ゝ梅
ゝ月ゝ波ゝ月能因のゝ
新月白梅千島や法華ゝ梅やゝ
花の雪ゝ月賀蘭ゝ早梅ゝ
丹霞ゝ丸ゝ人ゝ
陳家ゝ月ゝ
ゝ有明ゝ丹ゝ
ゝ寒梅ゝ紫早梅ゝ

稲妻の
ちらすを
見るも
不破の関
荷翠

傘ふ
ふぐり
かさつも
めと燕
其角

おどや山三

不破伴左ゑもん

傾城の
賢くるいの
柳こう
其角

ゆうぎりこうこう

[illegible]

右東山い京青蓮二曲さむし宣町ゆ光れ御所町と
いくるるれ頃京壹はけるもし小歌ゆるむそのち
けるこそ堺の灣高三隆達ゆ老婆ゆ[illegible]と
あるためうゆ[illegible]てうつ[illegible]ゆ[illegible]へて隆達ゆ
いくそ世ゆ民のれ時代ゆ国あるとすてさいにちつ

胚 妍 逞 慾

○不破道犬　伴左衛門丈

其角

あの声ぐ

石蜴

くらくろ

時鳥

回 雪 飛 僊

○白拍子藤波山魂

鬼貫

骸骨の

うつし

粧ふ

元見哉

食物も

喰ふ

水くさし

魂祭

嵐雪

水寒陰薄

○六字南無右衛門

いふぎちや
細首ちうす

大井川

宗因

畫足蛇皮

○丹波國因果娘

蛇ふと
きのぐ
おそろし

雉子
乃
邑

芭蕉

守節握符

○貞婦礒菜

言水

花瓜や
絃とかしこれ
琵琶の上

天機心匠

○浮世又平重起

大津繪の
筆乃くるわい
何佛

芭蕉

夜動畫藏

○銀杏前

鼠ぐるま

鼠ちりゆく

閨のひま

其角

裂石穿雲

○佐々木桂之助國知

其角

七月や暮露々笛と聞

又平妹於竜

昔話稲妻表紙總目録

巻之一

一 遺恨草履
二 風前燈火
三 胸中機関
四 荒屋奇計

巻之二

五 厄神報恩
六 因果小蛇
七 呪咀毒鼠
八 暗夜駿馬

巻之三

九 辻堂危難
十 夢幻落葉
十一 斷絃琵琶

巻之四

非風非幡

十二 修羅大鼓　十三 霊場熱閑　十四 仇家恩人
巻之五 上冊
十五 孤鴈樹福　十六 名畫奇特　十七 雪溪非熊
十八 花柳鞋當
全 下冊
十九 刀剣稻妻　二十 積善餘慶

以上

通計二十回

總目録終

昔話稻妻表紙巻之一

江戸　山東京傳編

一 遺恨の草履

今ハ昔人皇百三代後花園院の御宇。長禄年中。足利義政公の時代。雲州尼子の一族ふ。大和の國を領ス。佐々木判官貞國とゝ人あり。兄弟二人の男子をもてり。兄ハ桂之助國知といひて。今年二十五才あり。弟ハ花形丸とゝ十二才なり。兄ハ先妻の子。弟ハ後妻の蜘手の方との宗出生しゝる子なり。桂之助の伯父ふ藏人貞親とゝ人あり。是則判官貞國の弟なる由ふ一万町の分地を与へ。同國平群ふ別館を造りて。もゝおきけるが。一人の娘をもうけ。先ゝて夫婦ともふ。なきものゝ。その息女容顔美麗なれば。成長の後。桂之助の内室とせり。名を銀杏前

とゝの夫婦中もろ〳〵。やがて男子誕生あり。其名を助若といふく。今年七才かぞへなり。其比義政公京都室町に新館を営て花の御所と号し。兼て花車風流を好ミ給ひ。近仕の士も列侯の子息のうちより。美男と撰び〳〵召つれらるゝ。桂之助兼〳〵美男のきこえあるより。山撰びに入て京都にめされ。右近の馬場の旅館に住。室町の御所に通ひて勤らる。此度桂之助にたゞ〳〵上京し給ふる家士へ。執權不破道大が一子。不破伴左衛門重勝。長谷部雲六。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助大上雁八等なり。去程に桂之助妻子は国に残し置き其身独長〳〵在京御所勤の氣苦はかりなる事。頃日い病ぐちふきて折〳〵悩ミ給ひ。一時家士等。桂之助の前に集。伺ふ殿の鬱結を慰る支のやと評議しけり。茂家の重宝に。巨勢の金岡が画くる。百蟹の圖とて。百種の蟹を描たる

繪巻物あり。室町殿を〳〵古書画を好ミ給ふより。伴ゆ達し。御覧あるべきよし。命ぜられければ。国元より。名古屋三郎左衛門が一子。名古屋山三郎元春。彼巻物を携へ〳〵まゐり上り。とゝのへ。茂家館に逗留して御覧あり。兼て大殿中楽を好給ひしゆゑ。山三郎武藝のいとまに乱舞を学び〳〵扇をもて名誉の者ありけるに。皆〳〵口を揃へて〳〵やはり山三郎上京こそ幸ひなれ。かゝる一さ〳〵舞せて御覧ぜよ。かし彼が舞は国元〳〵にて〳〵覧あり。夏なれば。梶人あまた奥の座敷。頃日時わく向ひ。藤波とやを女あり。年ハ十七才のよ〳〵。歌舞吹弾の業も達し。ちゝを類まれなる美女〳〵。古の祇王祇女佛御前もとゝ〳〵とゝろざる若かくや。彼を召て山三が相人を。乱舞俳優を催ふべいとゝ観物かくやうと。伴なゝとゝ〳〵わるふぞ桂之助

大ふ喜び夫きふ〳〵奥へ〳〵ん。急ぎ催ふべ〳〵と命じけるべ。皆〳〵かし
こまりぬと〳〵退出ぬる日彼藤波。ゑ〳〵びふ囃方と召よせ。山之郎以
くのへて乱舞俳優とさせ美〳〵しく酒宴とまうけ〳〵。大ふ奥と催し
ゆかくて山之郎藤波うるく。種くの舞ありて後。酒飲の乱足。西寺
の嵐舞。無力墓。無骨蚯蚓の道行ぶり。福廣聖の袈裟求妙高尼の
繰繰乞あどつふ。両人立合の俳優めりて笑ひと生じ。終ふいとうて藤波。
男舞とふ秘事と舞ね。これい昔後鳥羽院の御宇。通憲入道。瀆波
の礒の前司とふ女ふ侍へる舞ありし。金の立烏帽子。白水干ふ紅の
大口とれ太刀とあひ〳〵立舞さあ。誠ニ沉魚落雁。羞月閉花の容
めり。もるぐへと袖い鶯鳳の舞ふひ〳〵〳〵。歌〳〵ふ声い頻伽の囀ぶ〳〵
あれい。皆人感ふ〳〵。奇妙の舞妓やと。賞嘆の声〳〵〳〵ハやまぐ〳〵。

此時より桂之助藤波と恋そめ〳〵。病いのづ〳〵う去只ひと川の水胸
ふかふれて恋の淵とかり。舞とろ〳〵ふ夏よせく。度〳〵めしよせけるが。
つひか俳優とまづ〳〵ひ〳〵〳〵。瀆波と桂之助の妻ふわ〳〵〳〵。舘ふ
引〳〵て給仕させ〳〵べ。桂之助望たり〳〵最愛〳〵〳〵。これが
妹ふ於龍〳〵。今年十三才ふ〳〵少女のありけると。これとも舘ふめ〳〵
よせ〳〵。瀆波がとべづ〳〵ふさせめ。藤波も桂之助ゑ義男ゑるふめで〳〵。
誠心と尽〳〵。鴛鴦の契浅〳〵ざり〳〵。桂之助ものづ〳〵御所の勤仕ゑ
〳〵ふ〳〵ありめ。されども佞臣ゑ〳〵れを幸〳〵。昼夜つ〳〵ろ〳〵
ど。ほ〳〵人〳〵ありて。酒宴嬉楽ふの〳〵〳〵〳〵せべ。旨酒珍膳席上
ふ〳〵ち。郢曲謳歌室中ふかはべ〳〵。恰も妓家娼門の所行ふ似〳〵。
〳〵ちて〳〵りける形勢あり。山之郎逗留の間ふ為体を見聞して。只

独胸とゝめ安さ心へせざりけり。さるれば伴左馬つのかどよりか。
茂彼ふ嘉慕し。千束の艶昏とおくることのへらも。藤彼ハ手ふもうれど。
尺〳〵これ以りど〳〵。一言の返答ぶせど。伴左馬一向ちひそぶま
らど。折とうゞひ申ま以ス〳〵。おそ〳〵つをゆ〳〵つかさぐと。茂彼ハじ
めハ彼ゞ恨憤らんるゆをせんて。心一ツふとさあおさりるゞ。今ハゆひこと
と得ど。桂之助ふ艶昏と又せ〳〵。彼ハふるまひとつぶさふ告ね。桂之助ハ
短氣の生れあるうへふ。心狂し〳〵かりうる時あれがこれをゆメとひとしく
奮然〳〵〳〵怒氣天ふさるめゞり。嘉兄伴左馬つを色出し。ゆの艶昏
とくうひろゞ〳〵ひけあハ。汝茂彼ふ不義とゆうけ。数通の艶昏を
おくる条。罪科甚重し。後日の又せ〳〵わふ。我こゞ〳〵手以くることを
ありとゆひをめへど。白鞘巻と抜くるゆ〳〵けもゞ。次の間ふひくそる

山之郎いそぐ〳〵走る。袖ふとりて押らわ。詞と尽〳〵ておゞあける
ふど。ゆり〳〵力とおさめ。ちるうへハ汝ふわゞ〳〵一命をたをけ。長く葛尚を
ありこ〳〵。ゆこう〳〵ふ命ゞ〳〵。伴左馬つが大ふとゆどる〳〵せ。庭上ふうおろさ
ちわけまバ。伴左馬つハ一言の分説あ〳〵。只打ちれ〳〵ゞ伏看る桂之助
山之郎と顧こ。汝上草履と以く。伴左馬つが面を打。辱め以ふへよと
命ゞ。山之郎頭をさゞげ。涙憤いうべきゆんどゞ。さゞゞぶ彼ハ執権職以
ゆる道犬が児子ゆて也へバ。この侵涙いとまつうハされくゞされしと願ゞ。
穿入ゞ。いゆ〳〵彼ゞこゞれ人畜ハ面ふ糞汁ゞちぐゞ。飽さ〳〵ゞ。こう〳〵
打よ。ゞし我命と背ゞ。いさまれつ。山之郎おれつ。ゆゆ世以背
ふハひつゞゞ。傍輩の因身武士の情ふゆへ。辱ふちのびゞ。押〳〵願
ゆれといそせもそゞゞいゆ〳〵行の宥免ゆ〳〵。汝若打ゞんがらふ

佐く木桂之助
恐て家士名古屋
山三郎小命じよ
草履とりく
不破伴左ヱ門が
面成
打
む
桂之助
おとろ

藤波
おごや山三
不破伴左門

勘当あり。打べきやう打まどきやう。返答せよと。せきふせたく詞詰し
けるに。山三郎ちからをうへ見非ふ及ばらぬ。いとゞ違背仕るべきさて。
袴のくゝり引ぬげ。上草履をとりて庭ふとり立。庭下駄をあ〳〵〳〵。
抱石ぬ〳〵〳〵。伴左衛つが傷ふちらづた。義令あれいせんをべるー。かあ〳〵ぞ
恨みなと。耳ちら〳〵いひきけく。草履をぬげ。面をかけく一打うち。
退んとをれを。桂之助緑先ふ出て一見ー。めな手弱ぞ山三郎。数あく
打〳〵辱めをとのゝせけるに。やむこゝを得ぞ立りどり。又ちら〳〵と連打
ふ打〳〵るふぞ。伴左衛つが鬢髪と。きれ。髪乱まく〳〵ふちのびぬ
形勢あり。桂之助呵〳〵と打笑。こゝみ〳〵彼と〳〵よ。こちよれ見物ふめ〳〵
ぞや。そや引ぬ〳〵後門より追拂へと命ぞ。ぞく〳〵奴僕等割竹を
とりて庭づ〳〵ふ出来。いざ〳〵追立けるに。伴左衛つちふ〳〵

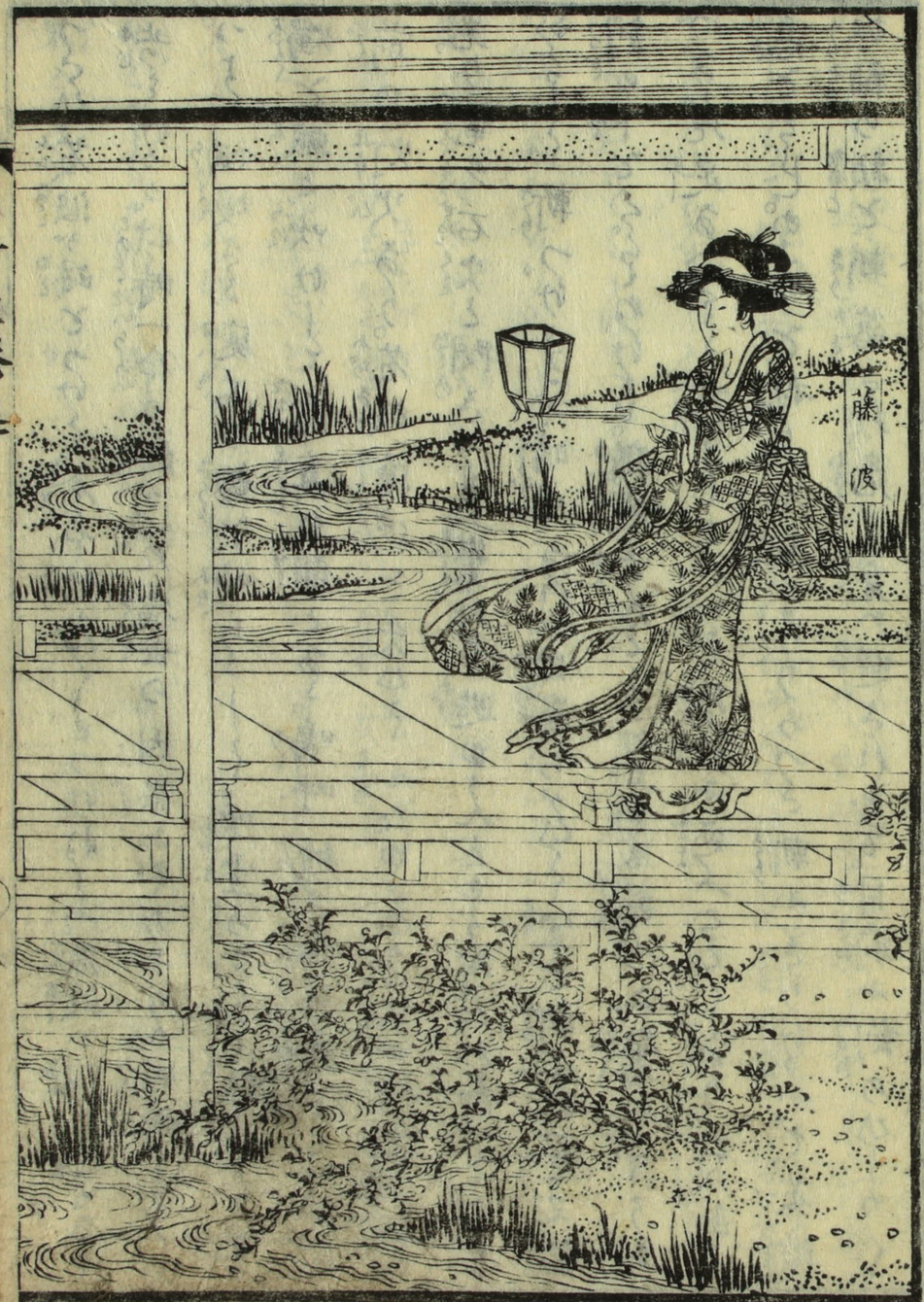
立あがりて。ちづふ衣服の塵と打拂ひ。山三郎と兄貴ふ恨こそいて
のたれ。これぞ遺恨の起〳〵〳〵後かぞ〳〵ひ知るとく〳〵後山三郎。
ちべ〳〵諫言をとりひけれども。桂之助轟ぞりもはゝと。侍臣等へ
山三郎とをいざけんと計ひ向め〳〵〳〵そりあるふより。桂之助山三郎ぬ
召出ー。百蟹の巻物ぞ覧をあべ。此方より別人と〳〵めをべー。
汝が役目をを〳〵れうへいさづふ在京せんも親人のおもとと所いづる。
〳〵〳〵飯國いをべとかれば山三郎心あ〳〵ぞといへども君命ぞ。
俄ふ行装とをのへく国えへまりくぐりぬ。ちりしより後へ誰帰る者
もあ〳〵。室町の御所へ重病と披露ー〳〵出仕をやめ。日夜の酒宴
糸竹の調ふ。春の日を暮あんこゝぬ晩ぬ。秋の夜も短ー〳〵と
明ふかちち。更ふ本性へあり。

二　風前の燈火

爰ふ又。山旅館とめづれる家士ふ。佐〻良二八郎とゝ。忠臣無二の者ありゝゝり。そゝ〻妻ふ伏おびて當館中ふ住けるが。山二郎 故國の後へ。桂之助の方持益ゆ〻〻〻成行くると深く悲〻。主君の前ふ出く諫けるに。虚病をおまへあのくゝ〻ど。旅館ふ妾とめつゝ日ふ放佚無慙の挙行論若室町御所ふきこえあり。ゆ〻〻しく大事。御家ふとゝ〻ゝふとんでゝ。こひねがゝくゝ芙蓉波ふいとまをつゝいこれ。持益方持とゝ〻〻くゝ〻ゝ。ゆ〻〻ふむひとのゝ〻〻。きゝ〻〻諫言せゝゝゝども。桂之助耳ふも実へど。日ふおゆて悪行ふのりくれべ。こハ郎熟ゆりひけるへゆくゝゝゝり詞を尺〻〻理と紙て諫ま〻〻ゝふ。御家入ゝゝゝゝへハせんゝゝべゝ。これ畢竟芙蓉波が邪香ふ迷ひ入ふかえゝ。

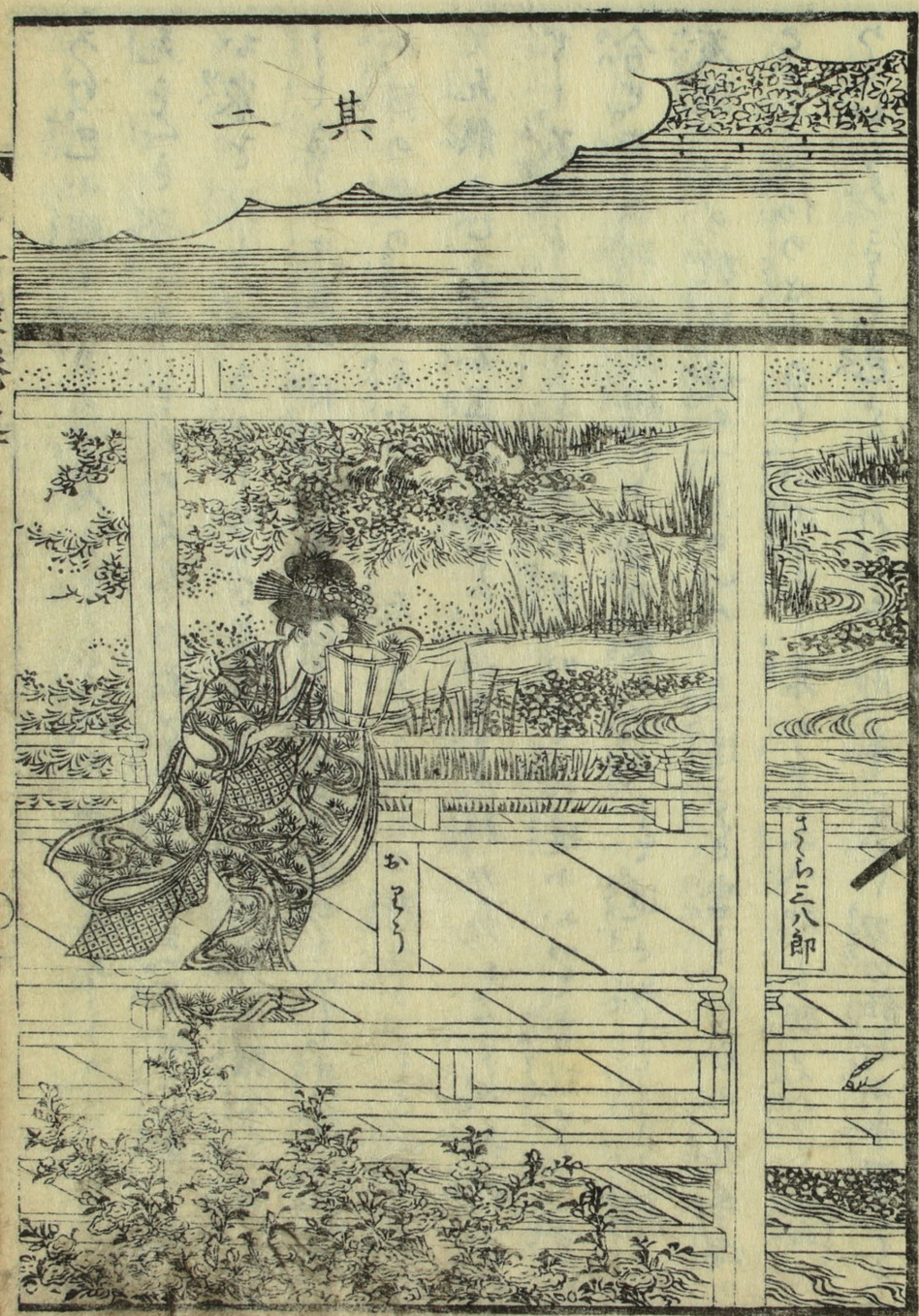
彼わゝん限ゝへゝふ諫ゆきをゝも悪行ゆむべゝゝゝ。根をゝらて葉をゆゝきの枝ふ折れば。折をゝゝゝ芙蓉波を殺〻。おの〻腹かきゆふゝて死をふゝ。科ふて女を殺ハ情ふ〻〻〻へゝゝ。御家ふハゆへゝ〻〻。越の范蠡西施を呉湖ふ放ちゝゝ例もあるゆのとと。ゝゝふ心ふ吹〻〻〻。よゝて折をがのとゝゝゝ居ゝるふ。一夜時ふゝゝね夜嵐の烈〻〻ゝと幸ひと。身軽ふ打拾ゝ奥庭ふきのび入。樹木の茂ゝゝゝ所ふかゝれゝ。芙蓉波が部屋ふ下ゝゝ待居ゝゝ。芙蓉波ハゆ〻〻ゝゝハ露ゝゝゝゝ。子ゝゝゝゝ比殿の前を退ゝゝ。ゝゝ碎の機嫌ゆ〻〻。ゝゝゝゝ手燭をゝゝ。濃紫の小袖のゝゝゝゝゝゝゝゝて。長ゝ廊架を歩ゝ来ゝ。こハ郎ゆ〻とゝゝゝゝ氷ゝゝゝ刀ふ抜ゝゝゝゝ。今ふ盛ふ咲乱ゝゝゝ。山吹躑躅早咲の蕊子花を踏ちゝゝゝゝ水の流ゝゝゝゝゝゝゝゝ。庭石をゝ越ゝ。廊架の手ゝゝゝの下を

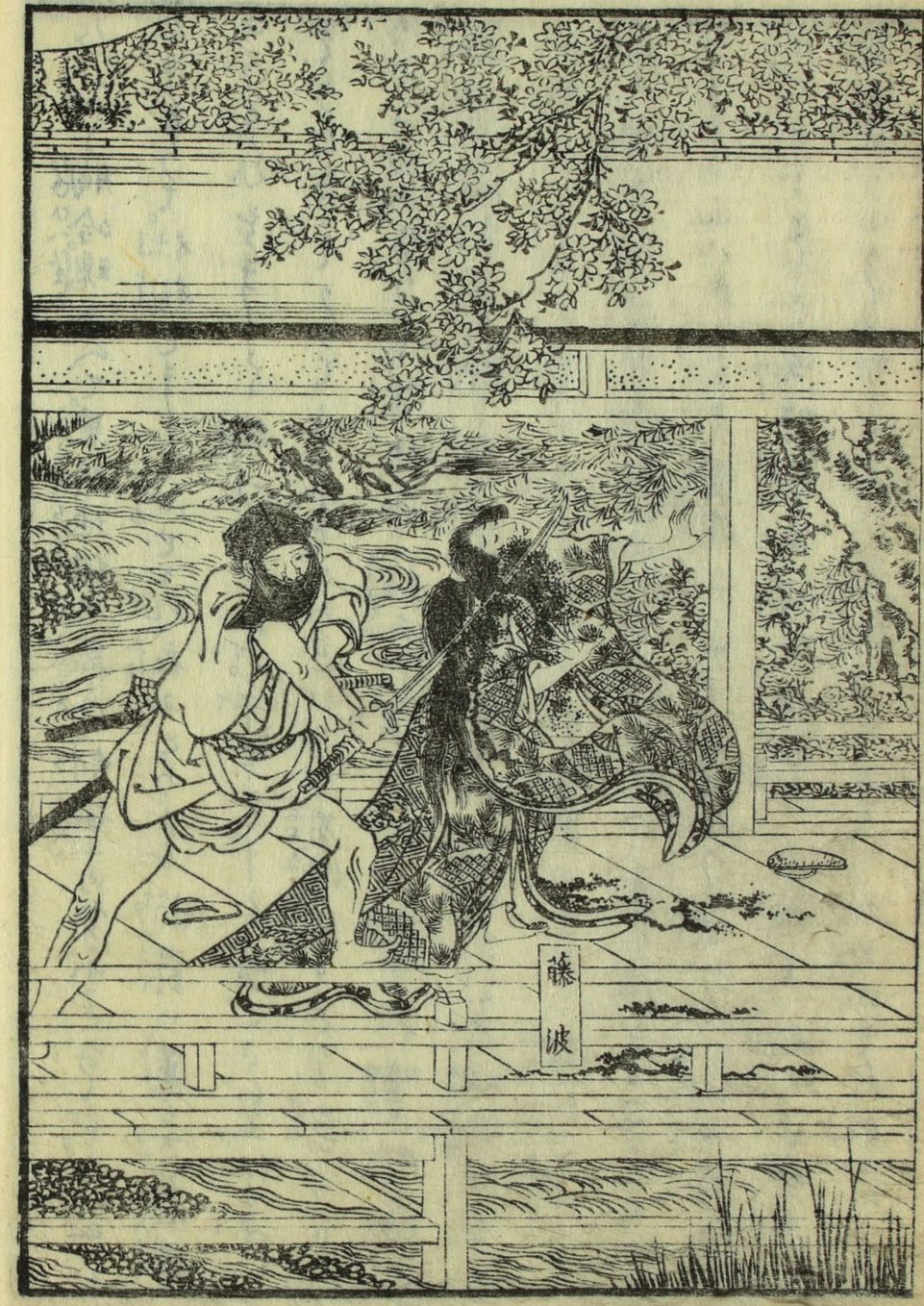
佐々木の家士
佐々良三八郎
忠義の為
白拍子
藤波と
殺し



つゝひ芳波が跡とつけ〻。今や斬んとつけれ〻ふ。芳波ハ仏の心もち〻
止つゝけるが此時一命の終るべき宿世の因果ふやゆりゐん。風雨まち〻
つよく爛熳たる庭木の櫻を吹ちら〻し〻。吹雪のごと〻散かゝり。手
燭と颯と吹けして忽真の闇となる。嗚呼彼が命の危さもげふ風
前の灯火なり。芳波進退を失ひ〻心たゞひるる而ふ暗裏ふ剣の
光り電光石火と閃きくるべく驚れ〻逃ゆんとする所ふ二八郎とゞり
ゆ〻つ〻〻斬つけるが。暗中なれば目嵩ちがひ〻室を斬ぬれと又斬
剣の下をくゞりぬけ〻。猶逃去んとしけるども。餘りふ驚れ。ふうち
つゐに足をへぎ〻走るとあるいなど。夢路ふ迷ふごと〻あり。二八郎ハ
息をとゝしめらを探り〻立まろり。ゆつと斬ふきりけるふぞ。芳波
振袖の袂と斬落され。危く身ハ避されども。目前ふ剣のひゝわく

たぶ〻胸吟魂きえて。黒暗地獄の罪人が剣樹ふのがるふとする〻ど。二八郎ハ
ひまどりて。仕損ぜまじと心せうれ。衣ふとりゐる蘭麝の薫る方と心嵩
ふうゝひをまつ〻斬つけうんば。手ごゝへ〻呀とさけぶ。仕をはし
きりとゝゝゝうけてきるふどのつゐむべ〻芳波たまさらる色ふ。
のけさるふるり〻。背後なる杉戸くゞるとおしふるり〻噇と倒る時ふ
奥深く立てる。燈火の光もりん来ふ乗〻ふ。その形勢とるる。
無慙やな左袈裟ふ斬さげらる。鮮血泉のごと〻漏流て身ふち
朱ふ染り。手足とゆ〻ふ。齒とかゝ〻ふ。苦し体。ゆる目をわて
ゆ〻り。二八郎せめ〻苦痛とさけびつゝ。ふかゝて吹ふ〻めの
刀とさ〻れを。嗚呼悲哉。嗚呼痛哉。十七歳を一期とて黄泉の
鬼とゆりふ〻り。ゆ〻て二八郎袖引ちぎりて血刀ふまれ。肌ふしく


其二
おさく
さくら二八郎

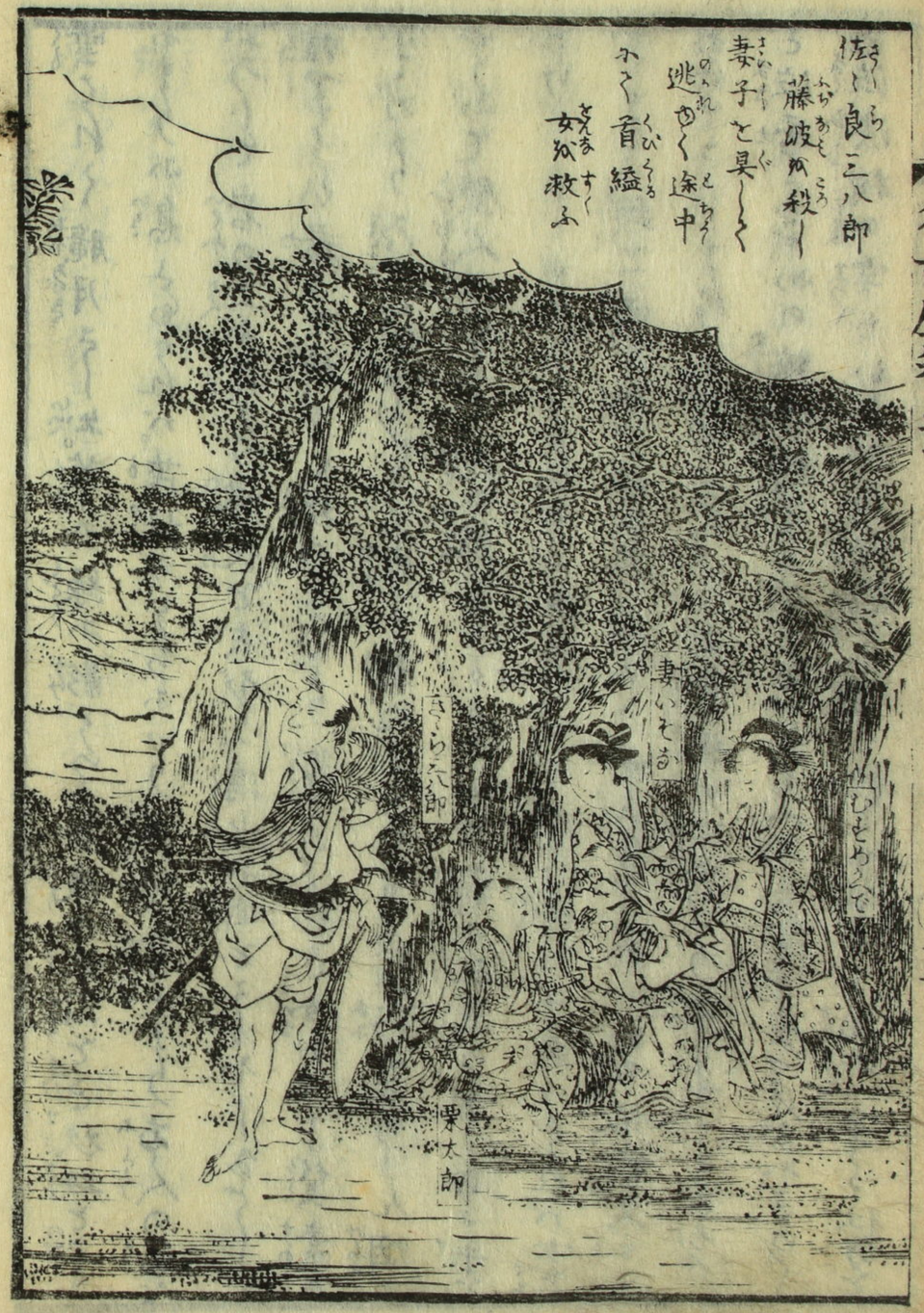

藤波

ろげ。已に腹をつきたるんとせしぶ。俄に やりひるがへ〳〵くるはいみ〳〵今死をべき命ぞめ〳〵ど。人の及ぶめぬこと幸なり。不破道犬が為体お家と乱をべれきぞ〳〵めり。これもりをぶ出奔し。権令とるがへて。よそ〳〵主君の目代なるり。彼が悪意を見めつ〳〵。其後は友波が所縁の者の。恨の刃ふかく〳〵死んこそ武士の乃るべと心をさだめて死骸ふひる。忠義の為ふんひる〳〵。科なれおこる無代に殺せし。不便さ〳〵ぞ〳〵山刀を刃かかる。冥途ふおいて分説さんと掌を合せ。南無阿弥陀佛〳〵と。口の裏に回向して。退き出んとしる折しも。友波が妹の於鈴。蛛の下りのつるり逃さを案じ。むひの為手燭をとり〳〵て伝の心もす〳〵山不まぐ来かる。こ八郎と顔見合せ。山血に つとおどろき〳〵。色をそんべ。こ八郎 手ぐや〳〵刀の鉦打に手燭をとり

〳〵と打落し。吻とさめ息つきもめへど。又庭つてひに迷出るぶ。深夜と夜嵐まを〳〵烈〳〵んば。誰一人られを知者なりをる。かくて こ八郎我家ふるり。妻磯菜ふをるぐの支を語りぶ〳〵。彼支をして。たく〳〵の金子を懐ふ〳〵。おの五八今年十二才ふる。楓とふ娘をせおひ。妻ふハ七才ふ紅栗太郎とふ男子をおハ也。夫婦をるびやうふ後門より逃出るぶ。四方暗〳〵して東西を辨ぜど。雨ハやつる〳〵降て篠と〳〵わるがぐ〳〵あんぐと。雨衣をぶ羽ふつけねば。濡衣足ふまを〳〵つと〳〵歩こがぐ〳〵。素足なれバ乃ねりて心めと前ふ走り羽ハめへ〳〵引る〳〵をち〳〵。おぶへど背後を顧まぶ。怪哉心火ぶつと燃より友波が姿かげるひのぐ〳〵めり〳〵。行をやぶどと引ぶむ。こ八郎 山時刃をうちぐるとぶ冷をりりけるが力を抜く斬れひ妻乃

手とりやく〳〵ゆふ〳〵又ぱらと炎燃て。茂波が姿をくと立。あるいとやう
じとさへうり。妻ふの風ふえへれども。こハ郎が目前かいまがろ〳〵の
ぢく〳〵つきまとり。此ふめ〳〵れ被延ふ立〳〵。斬ど杣へど立さず。勇氣
烈〳〵きこハ郎も。彼うちまぶ足をへぎて走ることのごと。妻乃
礦菓ともろりふ。たぢく〳〵とひどさん。髪と乱きりとそも破と。
彼俗をくして倒まつぶ。やり〳〵心を厲して。百歩ぢうも逃去時
烈風颯とおろ〳〵来く。人粒の雨ふてを打ぶぢく〳〵降かり。一團の心火
あ〳〵追て乾来り。ろり〳〵室中ゆく〳〵二つふけん。一つハ娘楓が横ふ入。一つ
ハ栗太郎が懐れりぬ。是乃茂波が死霊。兄弟の児をふつき眼を覩る
一端なり。かくて夫婦こけつまろびつ。ぢ走ふ走り。辛ぢて遥ふ逃
のび先彼俗恙なきん結びり。山叫ふいろりてやり〳〵風雨おさまり

雲ろれく朧月さ〳〵ム。草の縁ふ影うつると便ふ北山をと牧坂と上り
あまりふ息ろ。ゆろれば。茂林のうちふ入り。夫婦背上り人のふと
おろ〳〵て岩の上ふ尻うけ濡衣とたぶり。清水ふ咽どうるれ〳〵ぢく〳〵て
權ゆを〳〵ひ居る折〳〵も。坂のうへより若うろしき女ちく〳〵髮素足
ふて。ねうろとびをく〳〵と歩こ来ぬ。ろく〳〵ろれば行ふゆ〳〵ん烟の
ゆうふて。壁人のごとく。人の形をるり。女の前ふ立。糸のゆうある手を
あけく〳〵まねく〳〵まねけば女足をくやく〳〵歩む。まねうざれば女立
ぢでまり。頭と傾て物とやりへさゆる。女立ぢまればかの恠物。又手を
あげてさ〳〵まねく。かく〳〵ゆ〳〵も女。舊榎の下ふ入り權ふ入てさめぐ
と泣居るが。かの恠物梢とゆびさせば。女めへぎ見てうるづ見おかさめぐ
と泣涙梢の雫とおちかる。怪物又榎の枝とゆびさ〳〵。物行うくる仕方と


佐しら良二八郎
藤波ゑ殺し
妻子を具し〳〵
逃のく途中
かく首縊
女房救ふ
ひとやうで
さらえ郎
妻いそう
栗太郎

をれば。女うなづき前後を顧つて。やがて腰帯を解き本の枝に打かけうち
三八郎妻をくびる。本落の暗に隠れ暗に死なる。
彼怪物は世に死神なるべし。首縊模倣などいふものありて前に縊死
る者の亡魂樹下にうづまりて。死神とあり。人をいざなひ縊しむと。世
の語柄に伝へつたへども。眼前見るはこれがためなり。我忠義の為とも
のひあるべき罪なれば茨波を殺せし夏。ぶべき。悲しく愁る夏涙し。せめて此
女をたすけ茨波が冥福をもとむる種ともなし。怨魂とあざむる便とも
なしたんと思ひうち。彼女西にむかひ掌を合せ念仏数遍となへ
わびしく縊死んとすると。やれまてまてと声をかけて走り出。背後より抱
きとめむ。女はおどろかけざる夏あれば打驚き。思ひあまりて死ねばあれ者
あれがなるべしと死せてよ折角とひきとめるものを。二度のおもひさまる人

ようとつぶやきて又縊んとすると。とめとめ一命を失ん。とふかどあれば。
定しく迫る夏あるんが。まが其縁故と語りいへ。若我力に及ぶ夏あらば。
力を尽して救ふべきものとふ。女情涙を詠とゆ。行方の情方ない
なつかしさんざも誠に悲涙あはせあり。さらばあるべし其故を語るこそ。
生あるべへがくれ来あれば。仏法に見捨て侍通るべきかしといふ。三八郎
かさねていひけるは。なんぞ知ぬの者あれば。卒尓に語ぬはうべあれど。世の
常言に膝とも談合せよとふ夏あり。行ものもあれつまぬ語りいへとも
誠心面にあらはれけるぞ。女権思案して左ぐるり涙を侍心と云下にせん
もつぐあれば。一通語りたべしん。妾は此辺に住武士の浪人の妻なるが家
貧さにふるさとをいでて先祖傳来の物と。金二十両に質入したる夫の
妹なるものなり。これを愁ひ二十両の金子と合力しくれ侍れ

ゆへ今宵妾が彼質物を受りぞ〳〵まうれと。夫のいつの借るふより。金子を懐ろして出るが。途中にて盗人が出めひ殘らず奪ひとれ侍り。合力〳〵る妹の手前とは。夫に對して分説なく。面を合せがたくれば繼死んと覚悟をきらめいありと。愁の色を面に〳〵て語りけるに。こ八郎始終を聞。それなれば死るかおらぬぞ。幸ひ某少くの路銀を携へられば。其金の数ほど合力〳〵べし〳〵これにて質物を受りぞ〳〵いへと〳〵。金子二十両出して与へけるが。女これをうけもどし誠に涙を悲の涙まで骨身にとかべおりて快存じはじまりて語〳〵どれば夫を欺に似て。女のたまちをべ〳〵ぞ。いづれの為に死れぬる身の因果。今宵に追りはとのひて。涙瀧のごとし。こ八郎其詞を感じて。懐中の金子を貯布ぞう取〳〵。かの金をひろふ入て地上において。某語て山金を〳〵ふ〳〵ぞ拾〳〵ぞ。元のおちぬると拾ひ。其主の出るを其物をうちあるかあるに例ふ〳〵ればおん身二十あまり金ふとうるを恥ぞ。某又与へ恩ぞと。理を尽して与へけるぞ。女感涙ぞまるぞ。おん身のごとく大慈悲の人に世に又とあるべ〳〵ぞ。よも凡人にはまじ。観音菩薩權に身を現じて妾を救ひあるわとのひ。掌を合て再〳〵拜こ。ちなるうへに權山金を借用いと後日に身を售てありて。返〳〵まうせん。そも汝いづくの方にて。姓名いかとまうしいぞ。妾が夫の姓名と。いろんとせしをこ八郎。いとうへ〳〵ぞ。いつの〳〵其姓名めいしにふる。某が姓名もいまは素返済を〳〵ろ〳〵ふ〳〵ぞ。おん身の夫の名と我名を語ればおのづ

る。恩と著。恩ふ著るの理ふて某が意ふあるべ。浪夜といひ旅人の才
殊ふ足弱と伴ひといそげば。ひまどりがちし。浅縁もあるべかりて相
見めべしとひをてしめしの本意ふ走り入ば。女い涙と流しつ。金と
押つぶしてうとうとあ。ちぢ〳〵詫と依拝りと来しるへ急ぎ去ね

三　胸中の機関

さても右近の馬場の舘ふおさてへ。其夜芳波が妹於弦。姉の死骸と
見つけて大ふ驚き。色〳〵まぐ〳〵とければ。侍宿の武士等馳集り。
大ふ騒動しいそがしく主君の前ふ出て。まぐ〳〵と告きこへんば。
桂之助おいてまぐひく那裡ふ到る。芳波が死骸を點検して且驚
き且悲き。行者の所為あるやと疑ひ。先於弦をめして哀の様と問るふ
依て良三八郎が殺しなるよと告る折しも笹野蟹義いそうへ〳〵

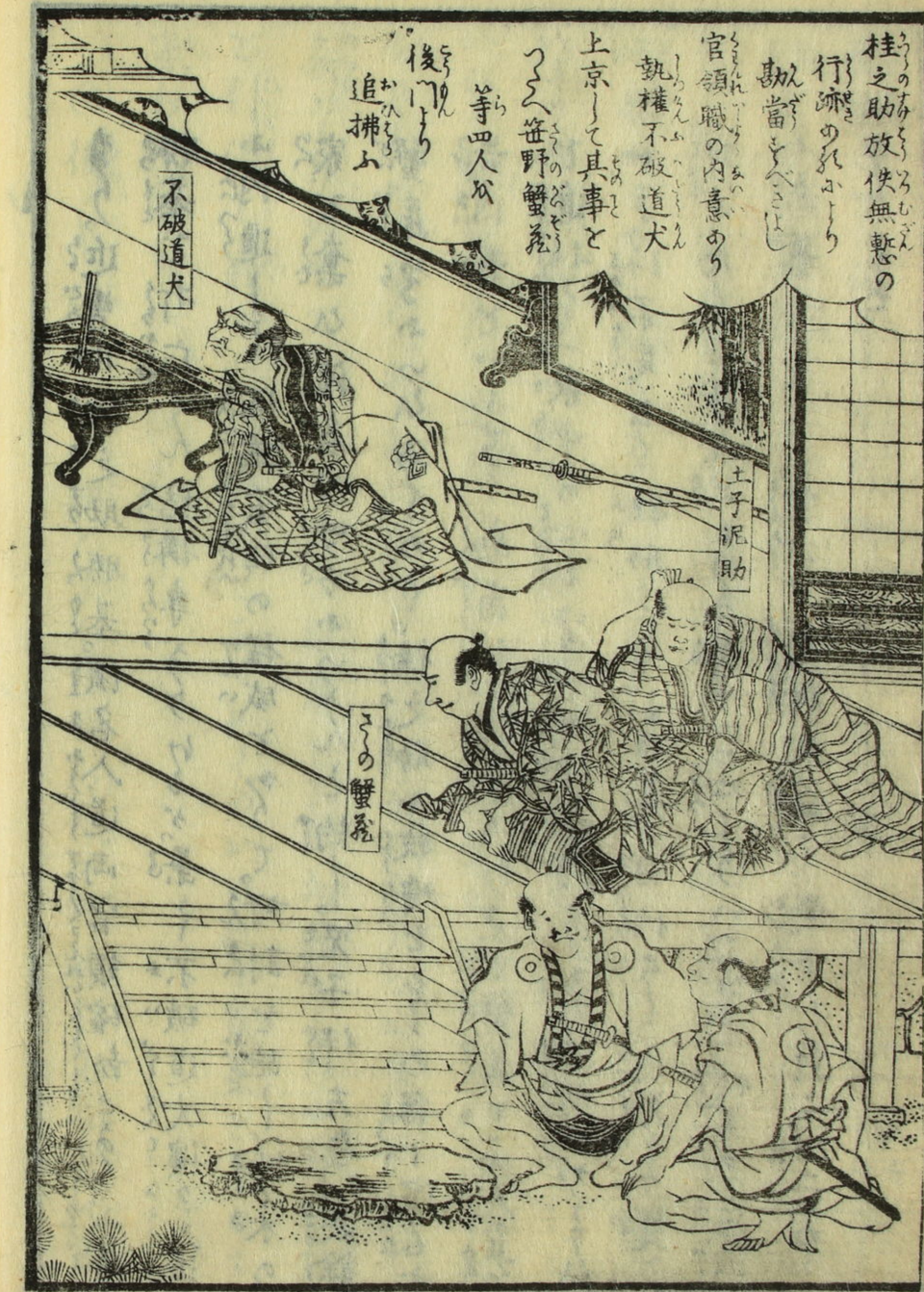
馳来る。百蟹の巻物紛失ひとやと。桂之助益驚き。舘中とこもや
ふ穿鑿めるふ。三八郎家財へ捨おき。妻子と携て逃去。長谷部雲六
も出奔の体ありとし。けはしべ。さてん彼等五人ひ合せて。百蟹の巻
物と盗取たりと。芳波ふ足とめ〳〵はせ。せんとあく害しきるふとぶ
あり。足弱をとるあひされべよる遠くい走るはし。追人をつかはしやく
捕へんむべしと命ずけるふぞ。四方ふ手分して追行るり。かくて翌
朝ふいたり。追人等立ちり。いづくへ逃去ゆやん。影ふ見へずと告れ
へ。桂之助只めさんとるぢうあり。これさへ不慮の騒動あるふ。取次の
侍士まちいで。御國元より。執權不破道大自弟ふのりまへ今著
駕ちとさんいと告る。桂之助眉とちいり先ぶて行の沙汰もあんふ。
乃太こぶうう上京せしへいとも心得ぶる支ぶり。行ゆやんと心安うべ。

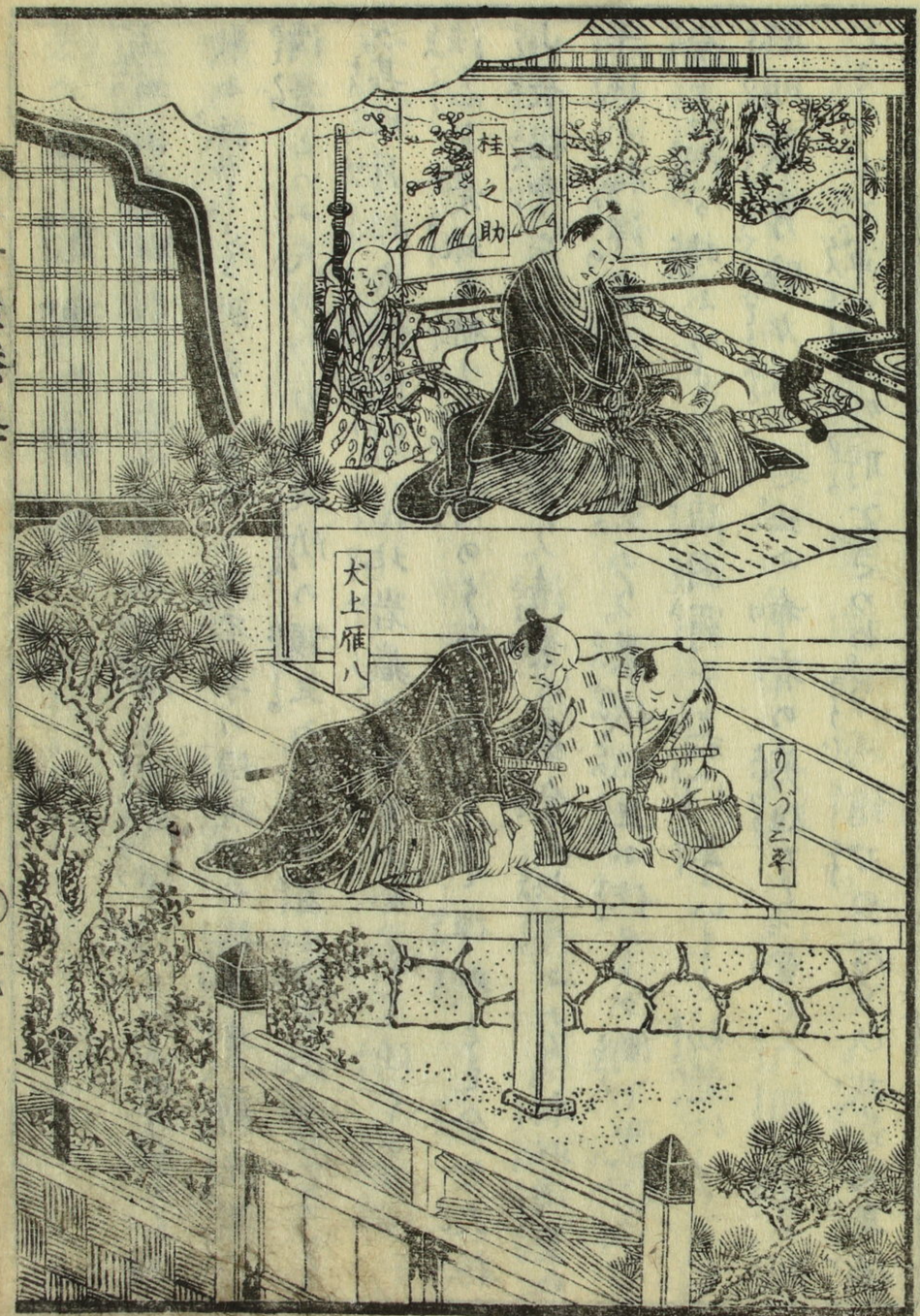
待居るほ程なく不破道犬旅裝束の侍おとうち通るそのさまいふとあんべ。惣髪の頭ほ素雪をつゞれた。ちりとされ額ほ老の波をたゝへ。高年といへども身軀もくゝよろふして。奸佞の面野狐のごとく。貪欲の眼皂雕ほ類し。相貌きはめて兇悪なり。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等。四人の者も。跡ほつきまとり出ね。桂之助道犬ほ對面し。先別事といふは。俄の上京仕度やん氣づかしとおもはれべ。道犬氣の毒顔ほひくるへ。火急の上京別義ほあらぬ。ちゃうど君御才持あしく。旅館ほおりて。自拍子を召抱て妾とあるひとのことあんべ。虚病とうまへ。佚遊宴楽ほ日と費し。御所の勤仕を抛こうろふ上。官領職濱名入道殿の御内ほ達し。擯斥をべきよう御内意あり。若もうせぞんべ。御家ほ其罪大殿の御耳ほおひあんべ。

よりあんべぜんをべくく。御勘當ほの御事あり大殿御自筆の罪狀御覧あるべとのゝ懐中より一通の狀をとり出そさおけば。桂之助うりあげて讀もおりゝど。胸ひくとぎんく大ほ後悔し。只さとうふきこと言あり。道犬かさゝいひくるへ。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等四人の者。君の御傍ほあり。御諫もせどかつく放埒をもくめりゝ。條。其罪軽ゝど。切腹とるべきせつけらるべきなれど。大殿の御慈悲をゝて。後ほより追払へこの裳金をうこゝ渡しければ。四人の者ほあげ首ゝどよりけれ。乃太又いたく。只今御次ほてうけたまはれべ。依て良二八郎。長谷部雲六と合せ昨夜百蟹の巻物を盗こ。御妾友彼と中ゝんを殺し逃去なるよう。さあれ内乱の起るも。總是君の御行跡よりゝかざるがあるべ。かの巻物ほ御家の

重宝といひ。いまゝ室町御所の清覧も済ぬよし。若もの共のこ
ひうへもん殿ハ達しあゞ。いかなる清咎のくんもなりがゝし。清痛
つゝゝゝゝゝゝ。こゝ立退いへかし。後日某ハ不かへても。清
皈恭めるべし取ゝゝひゝをゞし。只恙なくおつゝまゝゝ時の
いるゝ迄待ゐへ。かの女の死骸ハ縁者を召呼て引渡しいべしと
いひて。先ハの且が家来ハ令しゝ四人の者ハ追払せられ。桂之助
もせんかとあく。打ちかは且つ出去ける。心のうちかりひかれく
衣なり。ゝゝて乃大蔓波が縁者をよび。死骸をゝびハ妹於孤
を引渡し。館の財宝雑具をとりハさわ。おのれが家来をゞめて
守らせ。たゞちハ皈國をいそぐべし
○後ゝ此時の子細を聞ハ。皆乃太が奸計より出られ

ぬり。近曽由理之助勝基。濱名入道両官領確執とあり。入道
勝基を打亡さん結構専なりけるゞ。兼ゝ不破道犬濱名入道
ハ内通しゝ媚諂官領の権威をかりて。奸計を施し。佐ゝ木の
家を棄ひ。濱名の味方ハつゝんと約し。児子伴左衛門其餘
蟹義等ハいひふくめて。桂之助ハ放埒をゝめ。密ゝ濱名ハ
告。内意といせゝ甚尚ハらけしハ。つゞと蟹義等四人の者
を追はゝ。一家中の心をりさせ。伴左衛門ハ他所ハかくまん
おき。不足なく扶助しゝ。おの且ハ日代ゝ。内外より真と
計んたゝゝあり。只おの且等が一ツ心よりいでるハ。伴左衛門茂波
ハ慕しゝとして。雲六が巻物ハ盗ゝ逃去たりと。此二ツのこ
とゝ


桂之助放侠無慙の
行跡のかゝり
勘當もべさし
官領職の内意の
執權不破道犬
上京して其事を
つゝ笠野蟹義
等四人が
後門より
追拂ふ
不破道犬
土子泥助
さゝの蟹義


桂之助
犬上雁八
りくつ三平

㊃ 荒屋の奇計

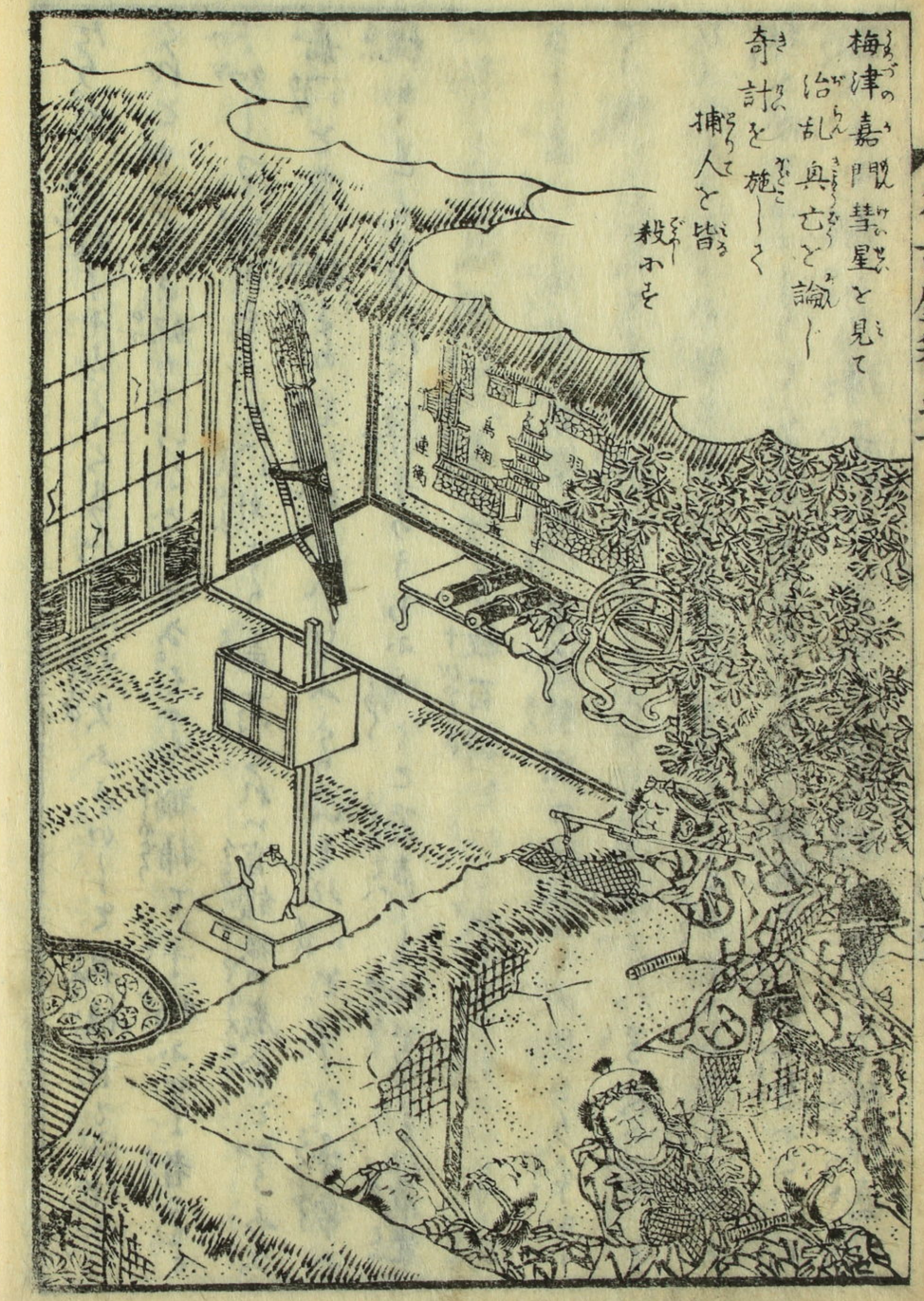
山城國葛野郡松尾の近さふ。梅津の里梅津川といふあり。そりふ古歌ふ詠じゝる所あり。そのうち元享の頃此里ふ梅津豊前左衛門清景といふ人ありけり。此所の領主ゆく。家富栄る武士ありける。其北月林大幢國師。洛北岩藏の菴室ふおいとを浄く尊信し法名を是球と称じ。領所のうちと附与して禪刹とす。今の大梅山長福寺といふい乃是なり。清景の墓今ふ此寺ふあり。扨此清景の子孫ふ梅津嘉門といふ者あり。累代此里ふ住るゞ漸くふ零落し今嘉門が時ふいたりて益困窮を。嘉門年いまゝ初老にいたる。聰明聚秀膽力人ふ過世ふ希有の英雄なり。曾て六韜三畧ふ眼とさゝて軍畧の妙所をきわめ。弓馬鎗刀のたぐひ。武藝の奥儀と曉し。天文地理神機妙筭進退急門の乃。其理を得ざるといふことなし。そのゆゑふ英名かくれなく。高禄と与へてめし抱んと。懇望の諸侯おかうりるが。名利ふ屈するときゝひゝ仕官をのぞまず。常ふ松尾山ふのぼり。採藥して藥店ふひさぐ。細煙として清貧をまもりて。いさゝか奢の心なく。一人の老母ふ孝行を尽し。姿も斬髪ふやつし。いまふい先祖清景大幢國師より傳来の禪味をあまんじ。世ふ語らいぬ暮し。実ふ一世の賢士なん知らるゝ。母も又賢かふく。今の世ふやく治平にめぐるも。仕へさるべき明君をと心を決し。嘉門が名利を屈せざるを知ひ。ぬのを織て日〻の費ふかへ。いさゝか貧苦を愁ず暮しぬ。ある時須日彗星わらいるふ。諸人心安からぬ吉凶を辨ずるあるゝ。一夜嘉門椽先ふ立出。かの星をめゝさ見。母をまねさて

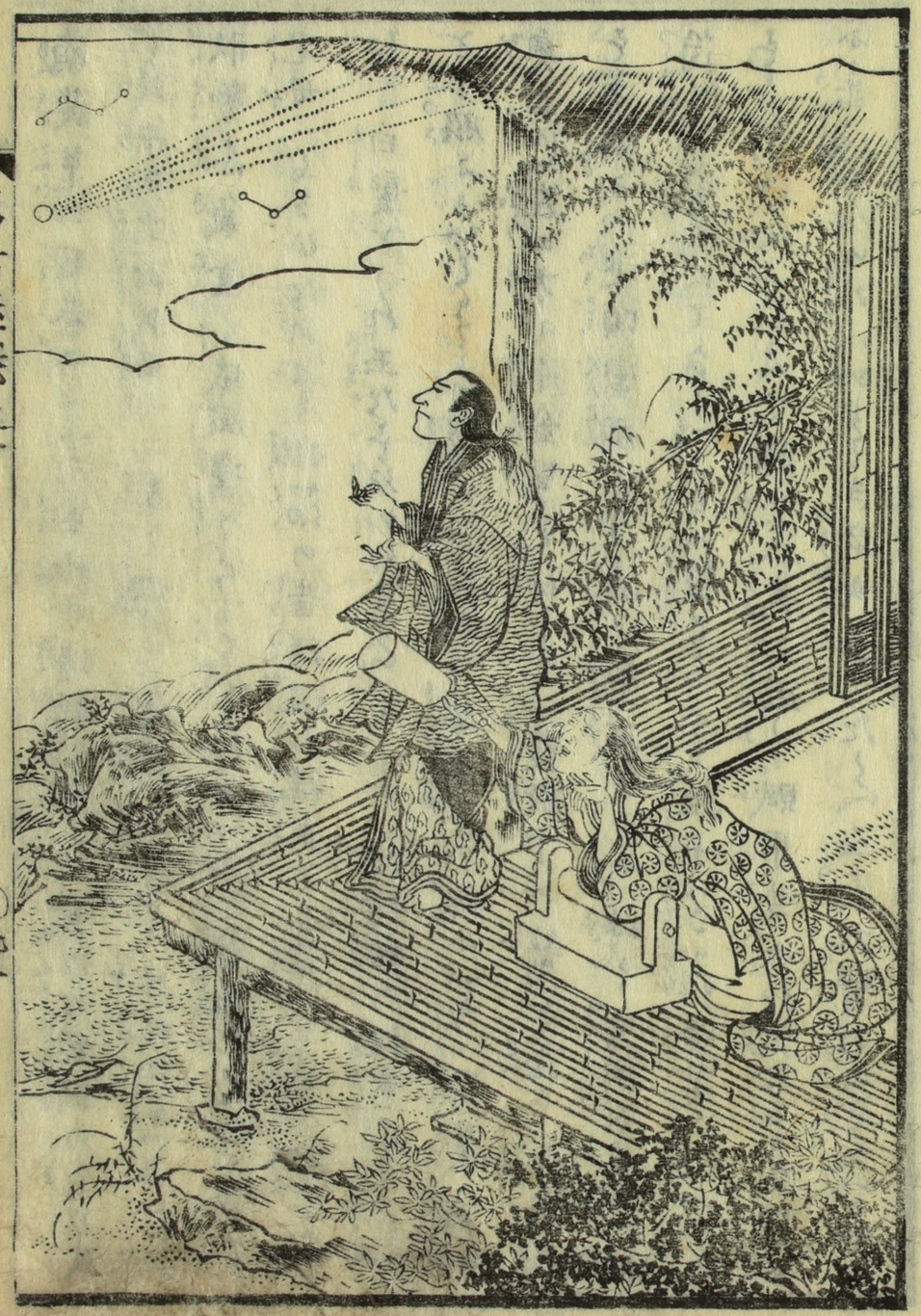
ひろい柿我邪ハ彗星あらはれたる事。皇極天皇の御宇。蘇我の入鹿
叛乱の時始て此星あらはれしより。今ハいつるまて一度も祥瑞あらこと
なし。凡彗ハ五ッあり。其色蒼ハ王候破亡て天子兵革ハ苦し。赤
きハ凶賊起りて国人安からず。黄なるハ女色害となる。白ハ兵を将
軍叛て兵乱大ハ起る。黒きハ水の精ゆへ。洪水河ハ溢て五穀登らず
又ハ此度の彗星。其色蒼ハ黄とおびたゝし。まことに乱牝雞晨しく
婦女権を奪天子兵革ハ苦しみ前兆ハ有りん。母人いとおりひ
ゆへ。老母點頭我もとくハその心つきぬ。花の都狐狼の
伏土となんと遠かゝじ。もゆく此所と考り山林ハかくれて。兵乱ハ
避るハもとゝべきとこひけるが。此後果して應仁の大乱起りぬ母子
両人の先見誠色わきまへあり。といふべし。此頃由理之助勝基。濱名

入道両官領あり。勝基ハ濱名ガ壻ハてもとゝ子あれども濱名
ガ子を養ひけるが。勝基實子出来れば。其養子を僧とせんと両家
確執をなり。濱名勝基を打亡し。おのれ権威をかゝいまふせん
と欲し。密に野伏浪人どもを召抱るゝ。嘉門ガ軍略ハ達しなるを
実かゝ。召抱んと使者を以て申ハ。嘉門ハ兼てへりくだり行跡をか
ゝ居たるゝへふ。使者ハ此のぶる所専官領職の権威とあるゝ。無礼の詞おか
うけ。嘉門心中ハ憤。招ハ應ぜるのゝ。かくてへりくだり日来の
不礼とかぞへてさゝ〳〵辱め。きびしくいひなるゝ。使者面目と
失ひかゝりの体ハて立帰る。へりくだり嘉門ガいつる様と。あらさまハ
告さこの。入乃実もあへぬ大ハ憤發し。やとれゝを腐儒者めうか。
憂目とゝせて後悔させんと。家来岩坂猪之八といふ荒男ハ。大力ハ

組子二十餘人を撰ぶへ。彼奴も智謀武術ふ秀る者あれば若手ふあまらば首ふして持うんと命ど。血氣ふ盛ふる猪之八かしこしゆと巻へ。小具足ふ身をかためて。彼奴たゝへ楠が智をたくひ。義經の早業を得らもの。痩浪人の分際ふ行衛のあらわん。黄土小屋と踏つふ首をちつかみかてかくんと廣言吐ば。思慮もあれ組子等いさゝをゝて相ちるゝ梅津の里へ急ゆく嗚呼嘉門が身のうへ危うゝ次第なり此時宵間の夜あらけるゞ。猪之八等嘉門が家ふ近づく比。月影めぐりて明あり。嘉門ハ燈下ふ書を讀壁人あり障子ふうつりたゝふ見ゆ。ゝで打砧の音まるハ老母の手業と出がし。猪之八等ハ竹林のうちふ身をひそめ。權便宜をうかゝ居るふ。嘉門宿島の鳴さつゝと笑つけ。ゆる笑止や我推量ふたがハぬ。命ちゝの愚人ども。我家を襲とかゝへ

たらへで皆殺しふもくくもんゝと。灯火ふきけして其後音も迄。猪之八ゝれと笑ふくゝ奴わが心ごゝろ。ゆ搦捕て手柄ふせし者ゝと下知しつ。先ふもゝて門外より邑高ゝれハ官領職の叡命をかうあり。嘉門をめし捕ゝめ岩坂猪之八もゝ。いそぐ門をひらけ尋常ふ縄かゝとゝれば。障子のうちふ呵くゝと笑邑し。汝等ゝ乱輩ハおろうたゝ。濱名入道ゝ数百騎を以て攻るゝ更ふかゝ所ゝ。嘉門が居宅ハ鉄壁石門要害堅固の城郭も同然あり。命おくハ頭をおさへてもゆ逃ゝとわざくらいふ。猪之八等大ふ怒門をひゝかんとゝふ堅ゝたゝ。おやゝ力をきはめくゝと押ふ。不ぞゆるまりてゝろゝぐゝ。ゝいゆゝと踏破り。大勢一度かゝ入て。椽の上ふ充上り。障子をゝろとゝけば。一間成ゝて梅津嘉門


梅津の嘉門彗星を見て
治乱興亡を論じ
奇計を施こす
捕人を皆
殺ふを



萌黄薫の腹巻のうへに。金紗の道服を着し。金作の圓鞘の太刀を
さゝれ。手に文曲武曲の二星を画きたる軍扇をもつて床机にかゝりたれ
ば勢。志氣堂々威風凛々たつていふも一個の英雄とこそ見えたり
老母いふるびたれども。摺箔の昔模様の袿衣を壺折て着し。雪とあざ
むく白髪をさゝれ。玉だすきをかけてうぐ〳〵打扮。銀の蛭巻もつる長刀
を小脇にかいこみて傍ひらへたる姿。老木の梅にいつ〳〵の薫殘りて
奥ゆかしく左の方に千金弩を秤じて。一發數十の箭を発て兵器共
をそろへ。右の近頃蠻國より渡る。磐石をも打碎く火術の具五六挺
筒先をそろへてのべたり。勢こゝかしこたる組子共も発道具に心おこゝ
に嘉門一人の外にかゝる老女あり。たゞ三面六臂わらもいとぞ

数くの箭玉をとゝのへことわさうんやうけぢうの兵具おそろ
ふたゝび。ようやくよりて搦捕若ゝ逃さじ我〳〵が殺度ありと下知
をくるふぞ。組子等げにもをさうとゝ。我先とわれ発からんと
ちらる所に。嘉門軍扇をあげて一めぐりあげば兼て用意の焔硝
縄に燈火うつり。綱火をあつて五六挺の火術の具一度に發し。其
ひゞき大雷のごとく。數の鉄丸飛出て。前にをくこたる組子十余人
打倒され。煙のうちにのたり伏をる。老母に長刀の鐔を以て弩を一つ発
ければ。數十の箭雨のごとく飛かゝりて。組子を殘らず射伏せり。
猪之八に手をかけ弩を脇にして箭玉をのがれ逃出んとせしを
忽板敷磊落とひるがへり。深き落し穴のうちに噇とおちいる。底ふかき
たる剣に身をつらぬれ。朱に染りて死してぞ。嘉門ならびに是等の

かまへをうつおきてる四方いうをうれば。これまで近國他國の諸侯乃請待ふ應ぜざれば。若おのれが器量とれなこと。不意を襲ふ者わるんとふせぐん乃あるが。果して此度不慮の難義をまぬがれうつ。さて嘉門老母ふむひ。今宵のうちに必ず濱名入道益怒多勢を以てこうかこまばのがるべしてだてまうらべし。幸母人を乞て山林ふ身を避く生涯無事を計ひん淨心あれば。今宵中ふ此所をとのがれ去ふまうしに。母人いハうぐおれをやうんとをふ。老母その意ふ同じ。母子ゑ人いそぐいしく弟支度して雑具ハ其侭にておき。先祖傳来の兵家の秘書。大憧國師の法語一巻のみを嘉門ガ懐ふし。老母を背負

巻之一終